

## クッキング・ボックス（中央）2点

トリンギット（北西海岸インディアン）  
使用年代 1900年頃  
高さ 32.0cm、39.5cm

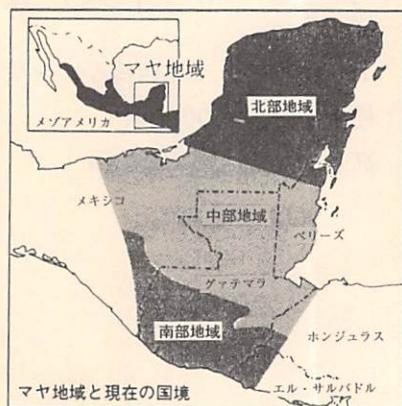
# 「マヤー歴史と民族の十字路」について

流氷観光のシーズンにもあたる2月の9日から3月21日まで、第5回特別展「マヤー歴史と民族の十字路」を開催しました。

当館は、この特別展期間中に開館3年目を迎えました。これまで北海道を含めた世界の北方諸地域に暮らす人びとの文化や歴史を紹介してきましたが、今回は中南米で調査研究を重ねてこられた、たばこと塩の博物館（東京）との共催によって、新大陸に栄えたマヤ文明へと視野を広げ、ガテマラから借用した貴重な資料を紹介する機会を得ることができました。

新大陸の先住民族は、数万年前にシベリアから陸続きであったペーリング海峡地域を通りアラスカに渡ったアジア系の人びとの末裔です。同じ起源を持つ北方系インディアンやイヌイトの生活から、低緯度に位置するマヤ地域の人びとの暮らしぶりに目を向けてみると、人類史上ではごく短い時間に広いアメリカ大陸全体に拡散していったそのエネルギーと、それぞれの自然環境にあった生き方を見出した人びとの**慧智**を感じとることができます。

展示は、先史時代の考古遺物と現在のメルカード（市）の再現の大きく二つの柱で構成し、多くの写真パネルや、ビデオと検索型のデータベースを用いて、自然環境や生活の様子をご理解いただけるよう努めました。以下に具体的な展示内容についてご紹介します。



## マヤ地方の環境

マヤ文明は「熱帯密林に生まれ、栄え、滅んだ」と考えられてきましたが、実際は、北はカリブ海に突き出たユカタン半島から南は太平洋岸までの多様な環境を有する広い地域が、マヤ文明の舞台でした。マヤは同系の言語を話す地域グループの集合体ということができ、ここではメソアメリカの他の民族文化の影響なども大きく受けながら、文化の中心は転々と移動してきました。交易が盛んで、戦いが多かったことなどからも、まさに「歴史と民族の十字路」といえるでしょう。

マヤ地域は、自然環境や築いた文化内容の違いから大きく南部、中部、北部の三地域に分けられ、「マヤ南部」は火山の多い高山帯を含み、低緯度にありながら気候も温暖で、太平洋岸斜面では多くの河川と肥沃な土地に恵まれています。早くから農耕が始まり、マヤ文明起源の地であることが近年の調査研究によって明らかになってきました。「中部」は高温多湿でジャングルが広がっており、農耕には適さぬ環境ではありましたが、川などの水運によって交易が盛んな場所でした。「北部」は、石灰質の岩盤の上に密林とサバンナが広がる水と土壤に恵まれない地域で、天日塩や蜂蜜を産物とし、海洋交易を行っていました。

展示では、写真パネルと地図を用いて三地域を概観できるようにしました。

## 古代マヤ文明

古代マヤ文明はまた、古いほうから「先古典期（～A.D. 200）」、「古典期（A.D. 200～1000）」、「後古典期（A.D. 1000～1524）」と大きく3つの時代区分がされており、さらにそれぞれが「前期」と「後期」に分けられています。

本特別展では、マヤ文明の起源の地である南部地域に焦点を当てていますので、時代区分でいうと先古典期の資料が大半を占めます。先史時代のコーナーでは石像、土器、ヒスイなどでできた装身具、儀礼用具、道具類などを時代順に展示し、

# 世界遺産マヤの歴史と文化

各時代の特徴を紹介しました。また、樹皮製の紙に暦や儀礼の様子などを文字で表した古文書「コデックス」の複製も展示しました。コデックスは征服者によってほとんどが焼き払われたため、現存するものはごくわずかです。

現在もたばこと塩の博物館が中心となって進めているプロジェクトの一環として行われた、日本人研究者たちによる発掘調査の成果も紹介しました。土のピラミッドから掘り出された初期の遺物は、素朴な感じを受けるものばかりでした。

## 現代の人びと

かつてのマヤの暮らしが、先に述べたような考古学的な調査や文字の解読、スペイン征服当時の記述などによって明らかになるにつれて、今日の人びとの生業や精神文化、社会組織、物質文化などには、多くの伝統が受け継がれていることがわかつきました。

例えは、今でも多くの人びとは農耕に従事しており、村の中央広場で週に一度か二度ほど開かれるメルカード（市）には食物や織物、食器などさまざまな生活必需品が持ち込まれ、売買されています。展示では主食であるトウモロコシや各種のインゲンマメ、トウガラシをはじめ多くの香辛料や調味料、カカオやタバコなどの嗜好品などと、薬草、香の類をバスケットやござの上に並べ、腐りやすいトマトや果物などは複製を展示しました。

そこに土器や織物・刺繡用の糸などが加わり、メ



先史時代のコーナー



メルカードの様子

ルカードを再現したコーナーは色鮮やかで、低くロープで囲っただけの露出展示でしたので、一つ一つのものを間近にご覧いただけたと思います。

また、女性が身に着けるウイビル（貫頭衣）のミニチュアをパネル展示し、地域（村）と用途によって多様なデザインがあることを紹介しました。

スペイン人によって持ち込まれたキリスト教も、マヤの人びとが元来信仰してきた宗教や世界観の中で解釈され、独自の宗教となって継承されています。キリスト教の祭りが華やかに行われる一方で、教会の前で香を焚いたり、石像などの古代文明の遺物崇拜が日常的に行われているのです。これらの様子は、写真パネルやビデオで紹介しました。

マヤ南部地域の多くを占めるグアテマラでは、現在も900万の人口のうち約6割が先住民であるマヤ系の人びとで、大部分の言語がこの地に残されていることからも、南部地域についての歴史上の重要性が指摘されています。

今回、はじめて北方以外の地域をテーマとしていることで、内容の組み立てや展示の仕方に難しさを感じるとともに、観覧者の反応も気になるところでした。しかし、期間中の総観覧者は3,000人を越え、冬季としては大変多くの方にご覧いただき、展示室での対話や講演会に関するアンケートなどで多くのご意見もお寄せいただきました。北方民族博物館の特別展としての評価はさまざまでしたが、それらをとおして当館に何が期待されているのか、改めて見詰め直すいい機会になったと思っています。

（学芸課 斎藤玲子）

## ○平成4年度第2回講演会

# 新大陸の古代文明と人びと

講師／東京大学教授 大貫 良夫 氏

2月21日には、大貫良夫氏を迎えて講演会を開催し、新大陸で独自に栄え滅んでいった二大文明圏の比較と、人びとの生活についてお話しいただきました。以下にその要旨を紹介します。

### 新大陸に渡ったモンゴロイド

アメリカ大陸では、12,000年前までは人類が居住した確かな証拠は見られず、シベリアから渡った集団が祖先であることが知られている。彼らは、人類学的にはモンゴロイドと呼ばれるアジア系の身体的特徴を持った人びとであるが、ベーリング海によって陸地が分断されてからは、イヌイットなど一部を除き旧大陸との接触は途絶え、独自に多様な環境下でそれぞれの生活を工夫してきた。

### 古代文明と現代の生活

いかなる文明も効率的な食糧生産を基盤にしているが、メソアメリカとアンデスの両文明に共通して栽培されていた植物はトウモロコシ、ジャガイモ、サツマイモ、カボチャ、インゲンマメ、トウガラシ等多くが挙げられる。小さくて収量の少ない野生種から、大きくて多量の実を付ける栽培種への改良に払われた努力は相当なものであった。

さまざまな食糧を開発してきた一方で、旧大陸の文明にはありながらこの二文明に無かったのが、鉄と車（輪）と大型家畜である。物の運搬は人力に頼り、利器はほとんどが石器であったことなどから、新大陸の文明はいわば全て人の手による「手づくり文明」とも言えるが、両地域ではヒスイなどの硬い石に巧みな細工を施したり、石を使った巨大な建築物を構築している。これらの遺物を見ていくと、もう少し人間が汗をかけ、資源やエネルギーの面で無駄や無理をせずにできることが沢山あるのではないかと思わせられるよう、古代文明は滅んで過去に終わってしまったものではなく、それを見つめることで、常に現代に生きる我々自身を別な視点で見直す契機となるだろう。

### 二つの文明の歴史

メソアメリカとアンデスは遠く離れているが、そ



の歴史的過程に類似する部分が少なくない。例えば、紀元前5,000年頃から両地域において徐々に農耕の発達が見られるようになり、同2,000年頃には定住の開始とともに土器や神殿などが作られ、同1,000年頃を境に急激な発展が始まり、文明の基礎を築く。そしてまさに西暦200年頃にメソアメリカで「古典期」、アンデスでは「地方発展期」あるいは「ワリ拡張期」と呼ばれる芸術的にも洗練された遺物が数多く残された、華やかな時代を迎え900～1,000年頃まで続く。以降、メソアメリカは軍事的征服や帝国支配の強まる政治的発展を遂げた時代となり、アンデスにおいては地方王国の発展がインカのような巨大帝国をうみ、広域支配が行われるようになる。同じ頃、マヤ地域の北側にアステカ王国が誕生する。その後1,500年代前半にはスペイン人に征服され、伝染病により人口も激減し、古代文明は滅びてしまう。

このように発展過程、各段階の特徴と年代が非常に似ている両文明であるが、大きな変化をもたらすような交流の証拠はわかっていない。アンデスで盛んに用いられた金は、メソアメリカでは遅い時代に少量が見られるだけで、反対にヒスイ、文字、暦はアンデスには見当たらないのである。

以上のように、二つの文明を概観された後、現地で撮影された遺跡などのスライドを用い、最近のペルーの調査で発掘された金の王冠をはじめとする遺物が現在日本で公開されるまでのエピソードなど、ユーモアを交えてご紹介くださいました。

90名以上の参加者を得て、古代文明への関心の高さを実感した一日でした。

## ○平成4年度第5回講座

# アイヌ考古学

講師／東京大学助教授 宇田川 洋 氏

民族考古学を基礎にしたアイヌ考古学を提唱している宇田川洋氏を講師に迎え、3月7日に講座を開催しました。以下にお話の概要を記します。

### アイヌ考古学へのアプローチ

学校教育で習う歴史は中央国家の政治史であり、一般庶民の生活はほとんど登場しない。例えば平安時代の庶民は竪穴住居に暮らしていたが、そのことは教科書には描かれずに貴族の世界だけがその時代の人びとの生活のすべてという錯覚に陥る。

北海道において、アイヌの人びとが暮らしてきた歴史を考えるうえで、アイヌ自身の歴史、つまり「アイヌ史」をどう考えるか、またアイヌと和人との関係の歴史をどうとらえるかが今、問題になっていると思う。ここで、歴史学、民族学、考古学といったものが一つになったアイヌ学があつてもよいのではないか。

そこで私は、民族考古学を基礎にしたアイヌ学を提唱している。日本において民族考古学が成立するのは、アイヌの人びとの生活がある北海道の地において他にないと考えており、この学問体系を「アイヌ考古学」と表現することにしている。アイヌ考古学とはアイヌの人びとが残した生活の跡を、考古学的に考えたらどう解釈できるかということと言える。

### アイヌ考古学の具体例

著名な民族考古学者である渡辺仁氏は、アイヌ文化の基本はクマの靈送り（イオマンテ）で、自集団意識（仲間意識）を再確認するために最も大切なものとし、これを中心に据えた「クマ祭文化複合体」というものを設定している。しかしアイヌの人びとは、クマだけではなく他の動物にもすべて神が宿っていると考えている。このクマの靈送りをはじめ、他の動物送り、道具送りも、同等にアイヌ文化にとって重要な要素となっている。そこで私は、「考古学からみたアイヌ文化複合体」というものを考えている。例えば送りの場所は、そこに送られた「モノ」が残っているために十分に



考古学の対象となるのである。

アイヌの人びとの考え方を如実に反映している重要な家の中の場所として「炉」がある。炉は人間と神の仲立ちをしてくれる火の神がいるところとして、アイヌが自集団意識を維持するための重要なポイントである。

この他に、北海道の各地にあるチャシ跡はアイヌ考古学の代表的な研究対象である。網走周辺にも数多くのチャシがあり、地域的には多い方に属すると言える。チャシは、伝承から50パーセントは戦いのための<sup>とりで</sup>砦として使ったとされる。その他に聖地や談判をする場所として、またオキクルミ、サマイクルのような人文神が利用したともされている。つまり、ふだんの生活の場所とは違う一定の区域、これがチャシといわれるもので、これまでのところ520か所をこえる発見がなされている。

さらにアイヌの口承伝承であるユーカラにたいして、考古学の方面からアプローチして、これをどう理解するかといったことまで進めている段階である。このあたりもアイヌ考古学が持っている役割であると考えている。

講座の中で紹介された書籍と、講師の主な著書は以下のとおりです。

藤本 強『もう二つの日本文化』1988 東京大学出版会

宇田川洋『アイヌ考古学』1980 教育社

『アイヌ伝承と砦』1981 北海道出版企画センター

『アイヌ文化成立史』1988 北海道出版企画センター

『イオマンテの考古学』1989 東京大学出版会

# ○平成4年度第5回講習会

## 挑戦！イグルー（雪の家）作り

講師／佐々木 亨（当館学芸員）

1月31日には、今年度最後の講習会として「挑戦！イグルー（雪の家）作り」を行いました。

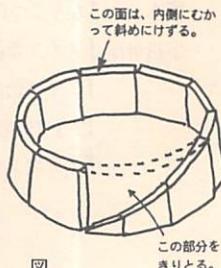
まずはじめに講堂で、イヌイトが実際にイグルーを作っている様子を撮影したビデオを用いて、イグルーの作り方などについて説明しました。このあと屋外に出てイグルー作りにとりかかりました。

イヌイトは実際には、地面（氷面）に積もった雪から、雪のブロックを切りだし、この雪のブロックをつかってイグルーを作ります。しかし、網走の雪質では、ブロックの切りだしがなかなか難しいので、あらかじめ大きなプラスチックのケースを型にして、雪のブロックを作つておき、下の二段に使いました。上方の段には切りだした雪を使いました。

雪面に直径2メートルほどの円をかき、この円にそって雪のブロックをならべます。次に、図のように一部を切りとり、その上かららせん状にブロックを積んでいきます。このとき、ブロックの載る面を少しけずって、ブロックを内側にたおしながら積んでいくのがポイントです。そうしないと、いつまでたっても雪の壁ばかりが高くなり、屋根ができないことになってしまいます。

この日は最高気温が0.2度と、平年よりも5度ほど高かったのですが、風は少々冷たいようでした。このような中で、一部がくずれるハプニングもありましたが、1時間半ほどで、無事に二棟のイグルーが完成しました。

なお、講習会に用いたビデオは博物館のビデオコーナーで視聴することができます。（タイトルは『イグルーの作り方』です。）



# 北海道立北方民族博物館

## 総合案内完成！

財団法人日本生命財団の助成により当博物館を紹介した「総合案内」書が完成し、3月22日、道庁知事室において贈呈式が行なわれました。小中学校、高校、公立図書館等に配布する分としての3,180冊を含めた6,180冊分の目録が、財団の高橋理事長から横路知事に手渡されました。

昨年3月に日本生命財団に助成申請が認められてから、編集を担当された千里文化財団と、当館との実質的な打合せが開始されたのは5月ころ、全体の構成を練り上げる作業と原稿を作成する作業が、ほぼ同時進行で行なわれました。さらに写真家の藤森武氏による資料撮影も相前後して進められ、一気呵成に目的に向かっているという状況が7月から9月くらいまで続きました。その後文字校正や写真的色校正を経て、印刷の運びとなりました。

本総合案内は全88ページで、大部分が展示室の案内に費やされています。写真で紹介されている資料は150点をこえ、展示の導線に沿って構成されています。カラー写真がふんだんに配されており、繊細でしかも迫力あるレイアウトで、展示室が紹介されています。



日本生命財団の助成によるこの総合案内は、全国で刊行されており当館は33番目、北海道では、北海道開拓記念館、釧路市立博物館に次いで3番目です。本書が当館とともに広く利用され、北方地域に暮らす人びとの理解が深まることを期待しています。この「総合案内」は1冊800円で館内において販売しておりますのでご利用ください。

Q

常設展示室の「北方民族の食」のところに展示してある、木製の箱はどのように用いたものなのですか。

A ご質問の資料は、北アメリカの北西海岸に住む、トリンギットのクッキングボックスです。

クッキングボックスは「鍋」として用いられていたものです。この資料は一枚の板に、切りこみをいれ、蒸気やお湯をつかって曲げ、一か所でとめて底をつけてあります。

材料と水をこのクッキングボックスにいれ、その中に熱く焼いた石をいれます。こうすると、石のもつ熱で水が沸騰し、調理することができました。

こうした調理方法はストーン・ボイリングとよばれています。ストーン・ボイリングに使われる石には、焼いても割れないものが選ばされました。

トリンギットは、ストーン・ボイリングをするときに、クッキングボックスのほかに、目をこまかく編んだ、バスケットも使っていました。（学芸課 筚倉いる美）

## 第6回特別展

### 北緯55度・アラスカ半島の先史文化

平成5年4月27日(日)～6月3日(木)／休館日 月曜日、4月29日、5月6・7・11日  
※5月3・4・5日は開館します

観覧料	一般	高校生・大学生	小学生・中学生
	250(200)円	80(50)円	50(30)円

かっこ内は10人以上の団体の場合

アラスカ半島の中央部、ベーリング海に面するホットスプリング遺跡では、日本の人類学者、考古学者らによって長く発掘調査が行われています。この遺跡は、今から5,500年前頃から600年前頃にかけて形成された、貝塚を含む大集落遺跡で、海洋に適応を果たしていった人ひとを知るうえで、重要なものです。本特別展では、漁撈(ぎょろう)具などの出土遺物を中心に、写真、図面、映像等でアラスカ半島の先史文化をご紹介します。

・9/19 第3回講習会

「ボーダーレス時代の北方地域研究」

講師 池谷和信氏（北海道大学）

6/6の第1回講座は午後1時から、その他の講演会、講座、講習会はいずれも午後2時から当館講堂にて開催します。参加は無料です。内容の詳細やお申し込みについては、博物館まで電話でお問い合わせください。

## お詫びと訂正

先号の博物館だよりで、講習会「北方の口琴の源流をもとめて」の要旨の中に下記の誤りがありました。訂正してお詫び申し上げます。

・1段目15行「オーストラリア」  
→「オセアニア」

・2段目23行「ウル(ur)」  
→「クル(kur)」

あるいはフル(khur)」



## 寄贈資料紹介

### ○アイヌのアザラシ皮製靴

北海道アイヌのアザラシ皮製の短靴  
1足が、札幌市の佐々保雄氏から寄贈されました。

## 執筆者ならびに出版社から贈呈をうけた書籍（1月～3月）

大林太良監修、小谷裕幸、森田明訳『東洋紀行3』平凡社 1993年  
大林太良『海の神話』講談社学術文庫 1993年  
斎藤君子『シベリア民話への旅』平凡社 1993年  
谷川健一他『漂流と漂着！総索引／海と列島文化別巻』小学館 1993年

## 主な来館者

1/31 片山一道氏（京都大学助教授）  
3/24 たばこと塩の博物館学芸員半田昌之氏、研究員榎玲子氏

## 観覧者動向 1月～3月

	常設展示	特別展示
1月	1,129名	—
2月	3,059名	1,960名
3月	2,468名	1,260名

第5回特別展の総観覧者数は3,220名でした。



刊行された総合案内

## みんぞく

### こうこ

### はくぶつかん

in Hokkaido (1月～3月)

- 1/1 「消えた流氷の民・古代オホーツク文化」/13まで11回シリーズ／AS
- 1/4 東北福祉大の芹沢長介教授・アイヌ民族の風俗画「蝦夷之風俗」入手・「画卷」知る上で貴重な資料／D
- 1/4 「タイミル・最北の先住民族」/9まで6回シリーズ／D (タ)
- 1/23 三十数年経て日の目・故中村チヨさんの口述『ギリヤークの昔話』米大学教授が聞き取り出版／AB
- 1/31 帯広市で第5回アイヌ民族文化祭・ロシア、台湾からも先住民族初参加／D
- 2/2 紋別の北方圏国際シンポジウムで作家のニコルさんが講演「自然との調和子どもに伝えて・イヌイットの例を参考に」／D
- 2/5 イヌイットのアクパリックさんとアイヌ記念館の萱野さん、作家のニコルさんを交え「狩猟などについて意見交換／D
- 2/6 「いま流氷は」紋別市と道立オホーツク流氷センターが首都圏、関西にファックスで速報中／M
- 2/7 「響けムックリ民族の心乗せ」北海道ウタリ協会札幌支部創立20周年記念式典で披露／M
- 2/15 アイヌ文化継承、民族復権に尽力 エカシ山本多助さん死去／AS,D,M,Y
- 2/19 函館市文学館4月に開館・久生十蘭、長谷川四郎…ゆかりの品1,500点余／D (タ)
- 2/21 アイヌ語辞典編さん作業大詰め萱野茂さん例文執筆に全精力・年内出版へ／D
- 2/24 「フチの伝える心・食生活から冬編」(ヤイ・ユーカラの森運営委員・計良智子さん筆) 3/3まで8回シリーズ／D
- 3/1 国内最大の石刀・旧石器後期、長さ30.2cm 今金町美利河1遺跡で発掘／Y
- 3/6 「極北の知恵知ってほしい」女優の和泉さん・士別市にイヌイットの民具などを寄贈／AS
- 3/16 「国際先住民年・アイヌモシリで」/19まで4回シリーズ／AS
- 3/16 余市大川遺跡「和人焼き打ち」裏付け アイヌ民族ほう起・中世遺構から炭化物／D,Y
- 3/24 函館・北方民族資料館がぐんとリフレッシュ4/1オープン／D

\* A B 網走新聞

A S 朝日新聞（道東北網版）

D 北海道新聞（オホーツク版）

M 毎日新聞（道東北版）

Y 読売新聞（北網版）

複数紙掲載の場合は、扱いの大きい方を紹介しています。

## 編集後記

第5回特別展が終了したと思っていたら、すぐに次の「アラスカ半島の先史文化」展が始まる。今まで当館では夏・冬と年2回の特別展を行ってきたが、今年は夏に国際先住民年記念の特別展を企画しているため、あまり間隔を置かずの開催となる。

特別展は、常設展を補い個別のテーマを掘り下げるという、博物館にとって普及活動であるとともに研究成果の発表の場でもある。事前の調査や印刷物の作成など、準備には相当の時間を要し、多くの博物館で特別展を中心にして事業が回っているようだ。それだけに「限られた期間であってもいい展示」と新年度に向けて意を強くしている。

(斎藤)